

# ホイアンの都市構造

## URBAN STRUCTURE OF HOI AN

泉田 英雄\*

IZUMIDA Hideo

Tran Phu Street is the main street of the historical district in Hoi An. It is believed that in French colonial period, Tran Phu Street was transformed into the present straight road. One of the characteristics of Hoi An is that many shrines and family chapels are concentrated in Tran Phu Street. Moreover, Hoi An had a port town function unique from that of the other South-East Asian port towns.

### 1. はじめに

ホイアンの街について、1989年に開かれたホイアンシンポジウムで基本的な情報資料が示されたが、その構造に係わる歴史的文献資料は非常に限られている。そのため、建物を始めとして、街路、橋、井戸、石碑などの遺構の現況を聞き取りや実測を通して精緻に記録してゆくことが最も重要である。それとともに、周辺都市との比較の視点が不可欠で、近代以前は今日我々が考える以上に南シナ海沿岸都市間には文化交流があった。

聞き取り調査は、せいぜい百年ぐらい前のことぐらいしか分からないが、ホイアンに関してはこれまで十分に行われてきたとはいえない。廟や祠堂などの管理者や長老と呼ばれる人たち

から、フランス植民地支配以前から直後の街の姿をもう少し聞き出せる可能性がある。次にさまざまな遺構を種別と建設年代と位置の関係によって分析してみなければならない。そうすれば、この街がどのようにしてできてきたのかかなり明らかにすることができるであろう。

1994年の3月と10月に以上のような調査を短期間試みたので、他の街と比較しながらホイアンの街の全体的な構造（地形と構造物の配置）の特徴を述べてみたい。

### 2. ホイアンの形態的特徴

#### (1) 軸線と街路

今日街路は直線になっているが、おそらく植民地統治時代に道の曲線部が矯正されたり、街

\* 筑波大学芸術学系講師

Lecturer, School of Art and Design, Univ. of Tsukuba

路へのはみ出し部分が撤去され、今日の直線的な道になったのであろう。街路の中で、チャンフー通りに最も古い建築物が集中しており、発掘調査と土地台帳調査によれば18世紀末までこの通りの南側が川岸であったことが分かっている。すなわち、南北軸線がこの居住地を貫通しているのが大きな特徴である。

この軸線との交差点の北側には、一例を除くと必ず廟が置かれている。一番東側のチャン・クイ・チャップ街の北側には福建会館（旧天后廟）が位置し、またその南側は市場と一帯になっており、河岸まで続いている。植民地時代に拡張され、このように広い道になったのであろう。この道に沿って明郷の境界石が置かれていることから、この道が18世紀末には明郷の東端であったらしい。

次にホアン・バン・チュウ街であるが、軸線との交差点には中華会館が置かれている。現在では週末の中国語学校として機能しているだけで、廟や市場としての賑わいはない。その西側にはレ・ロイ通りが南北に走っているが、これには特別な目標物がなく、植民地統治時代に建設されたものであると考えられる。一番西側には廣肇会館があり、これも川岸に向かって道が走っている。このように、南北方向の道は河岸と廟を繋ぐように走るのが特徴である。

## (2) 小道

チャンフー通りとファン・チュー・チン通りの間に4本の曲がりくねった小道が走っている。一番東側のものは福建会館の脇を抜けて北方に走るもので、文廟（孔子廟）を目指している。中華会館の脇から北上する小道は、ファン・チュー・チン通りを横切って集落へと続いている。三番目のものは、チャン・フー通り96番脇から小学校裏で右折しながらファン・チュー・チン通りに達して、そこを突き抜けて北側の集落に達している。袋小路になったところに、

立派な石敢当を構えた屋敷がある。かつての役人の家と思われる。レ・ロイ通りの西側にもう一つの小道があり、これもまっすぐに北上するのではなく、途中で鍵折れし、ファン・チュー・チン通りを抜けて、北の集落に達している。

ファン・チュー・チン通りのすぐ北側には一戸建ての古い屋敷が集まっており、ここには商人層ではなく役人層や文士層の居住地であったと考えられる。

## (3) 砂州

河の中を見ると、右手に小さな砂州と左手に大きな砂州が横たわっており、河全体の幅は目視できない。トゥボン河の場合、砂州の形成年代は古く、少なくとも17世紀にはこのような地形であったことがわかっている。砂州の存在は大型の船の停泊に不都合であったはずで、後で検討するようにこのような場所が居住地に選ばれたが儒教・風水の考え方であったかもしれない。

## (4) 廟、祠堂

個々の建物は基本的には南北に長い一戸建て町家で、その間に祠堂や廟が点在している。その中で、東端に位置する福建会館（天后廟）が南西方向に大きく振れており、異色である。聞き取りによれば、その方向にある茶眉山が、会館から流れる気を受けとめているのだという。また、会館はチャンフー通りからかなり奥まったところにあり、それも異色である。おそらく福建会館は、18世紀末にはチャンフー通りとグエン・フエ通りの角地を含む大きな敷地であったと考えられる。

先祖を祭った祠堂は、この居住地の西側と北方に集中しており、中国人の死者を西（日没方向）に置くという信仰に基づくものと思われる。

## (5) 井戸、石敢当

古い井戸はチャン・フー通りの北側町家の裏側に点在している。これらは町家とともに掘

削されたものであろう。

バイ・デ・ケの裏側には、この井戸とともに悪霊の侵入を阻止する石敢当が置かれている。ここはかつて大きな屋敷の入り口であったと考えられる。もう一つファン・チュー・チン通りの北側にも石敢当が見つかった（図1）。

### 3. 特徴の検討

#### (1) 港市と信仰

南シナ海沿岸の華人街では、東西の河岸に平行した軸線は普遍的に見られるものである。フエの最初期華人街はその好例で、街路だけではなく砂州と廟の配置においても共通点が見られる。今日、フエの廟は仏教寺院に改修されているが、かつては天后が東側、関帝が西側であった。中央の建物はかなり以前に崩壊してしまって不明。カントーやロンスエンでも東に天后廟（仏教寺院に改修）と西に関帝廟（天后廟と統合）。

中国福建省や他の東南アジアの港市で廟が軸線上に複数置かれた例は見たことがない。媽祖信仰は中国南部沿岸地方の住民の間で11世紀以降広まったもので、16、17世紀頃に天后と改称されて東南アジア各地に伝播し、基本的には彼

らの居住地の中心的位置を占めている。ホイアンを始めヴェトナムの華人街で関帝が同等の地位を与えられているのは、移住してきた中国人たちの出身地と身分に関係するものなのかもしれない。

また、南洋華人街では廟の前は河岸に繋がる広場や道があり、そこは普段は市場として使われ、時として舞台がしつらえられる。ホイアンの場合も三つの廟の前の道がそれに当たる。

五行廟は、グエン・タイ・ホック通りとファン・チュー・チン通り北側の集落の中に二つ存在するが、これが都市構造の中のどんな位置を占めるのか不明である。これまで南シナ海沿岸の街では見たことがない。

#### (2) 風水

南洋華人街の場合、平坦な海岸近くに位置するために山を背にすることが難しく風水を具現化した例は少ない。しかしながら、わずかではあるがその影響は見られる。ホイアンの場合、フエとともに二つの砂州がそれぞれ白虎と青龍を示していると考えられる。このような例は中国国内では福州と泉州がそうである。それから、祠堂が西側に集中するというのも風水で説明できる。中国国内では文化大革命期に祠堂や廟が

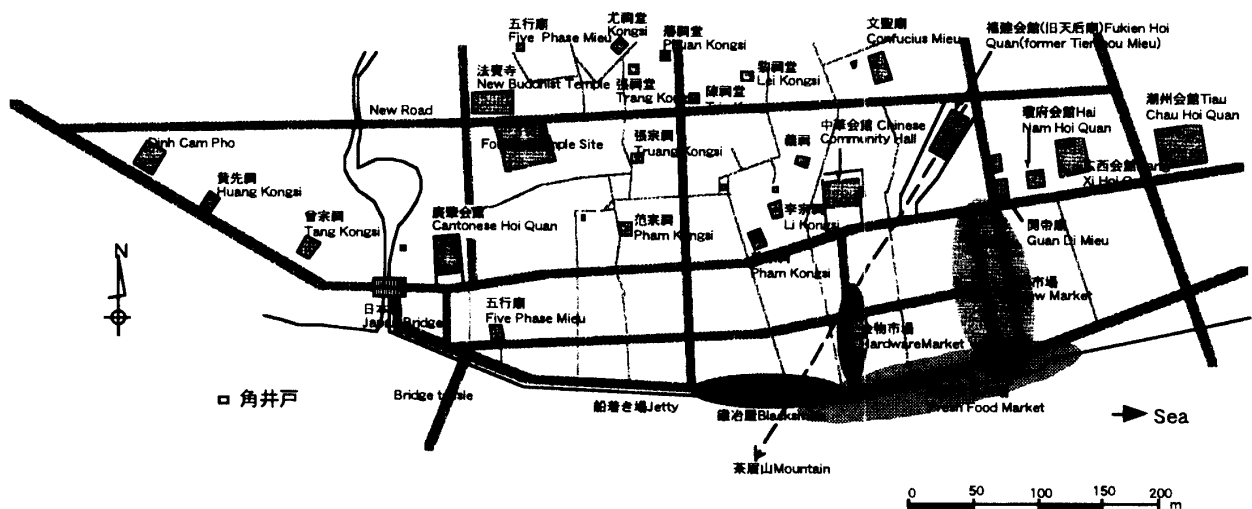


図1 ホイアンの公司と廟

ほとんど取り壊され、特に祠堂は福州や泉州の街の中で発見することはできなかった。天后廟も工場や店舗に改修されていた（図2）。

#### 4. まとめ

ホイアンを始めとするヴェトナムの華人街は、港市機能や風水に従いながらも南シナ海沿

岸の街とは少し異なった構造を持っている。一つは廟屋と祠堂の数の多さとそれらの位置関係であり、もう一つは小道を含む街路形成のプロセスとパターンである。それらを明らかにするの今後の課題であろう。

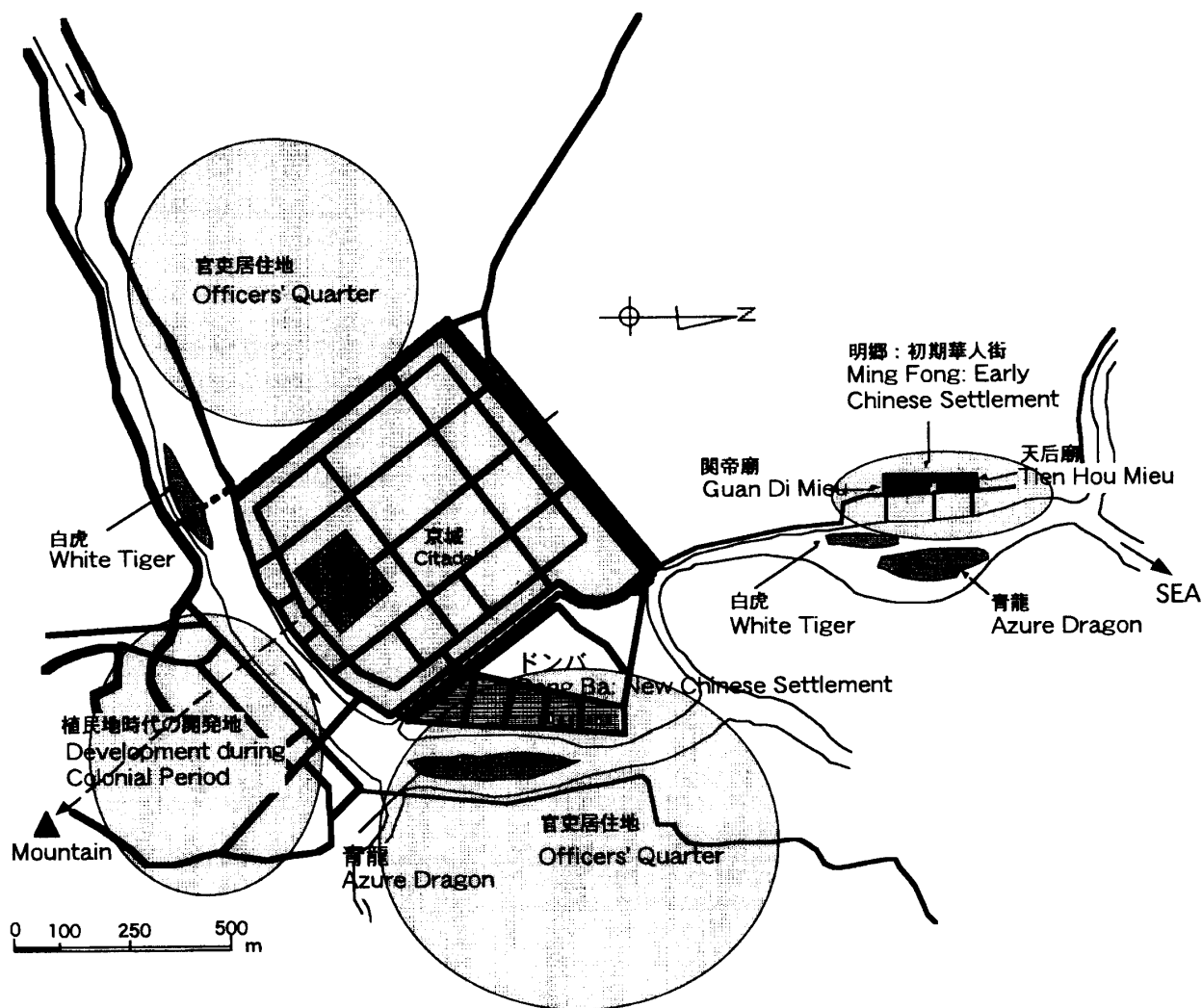


図2 フエの空間配置と華人街